11 月 20 日のメッセージ

聖書：サムエル記下　5：　1－5

「油を注ぎ」

もともとイスラエルには王がいませんでした。いや、必要なかったのです。

族長アブラハムの時代、神は直接言葉をかけられ、直接導かれました。モーセの時代も変わりません。そして、イスラエルの民はモーセの導きの下、乳と蜜の流れる地、カナンに到着します。豊かな土地でイスラエルはますます豊かになります。と同時に、問題も増えてきました。そこで神は、士師(今で言う裁判官)を立てられ、都度、問題に対処させることにされます。

ところが、さらに国が大きくなり、隣国との争いが大きくなると、民に不満が溜まるようになります。隣国には王がいて、何事も迅速に決まる(ように見えます)。一方、それと比べてイスラエルは……。イスラエルの民は「自分たちにも王を！」と願うようになりました。

そこで、神は民の求めに応じて、王サウルを立てられます(「サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ……言った。『主があなたに油を注ぎ、御自分の嗣業の民の指導者とされたのです。』」サムエル記上 10:1)。王の下に一致団結したイスラエルは連戦連勝(「サウルは……周りのすべての敵……と戦わねばならなかったが、向かうところどこでも勝利を収めた。」サムエル記上 14:47)。「やはり王の力は偉大だ」と人々は喜びました。

ところが、サウルは次第に神の言葉を聞こうとしなくなります。そこで、新たに立てられたのがダビデでした(「長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。」サムエル記下 5:3)。ダビデは神の言葉を聞いて行う人だったので、神も喜ばれます(「油注がれた人を、ダビデとその子孫を／とこしえまで／慈しみのうちにおかれる。」詩編 18:51)。ところが、そのダビデでさえも神から離れる時がありました(「ダビデは人をやって彼女(ウリヤの妻)を王宮に引き取り、妻にした。……ダビデのしたことは主の御心に適わなかった。」サムエル記下 11:27)。やはり、人間には完全に神に従いながら、王としての役割を果たすことは難しいのでしょうか。

それでも神は、イスラエルと立てた契約を思い起こされ、滅ぼすことだけはされませんでした。ただひたすら、人々が自分の元に立ち帰ってくることを待っておられました。

時が流れ、神はイスラエルに最後の王を与えられます。けれども、この王はこれまでの王とは少し、いや、ずいぶん違います。確かに、他の王と同じように、他の人を助ける方でした。身を粉にして働き、弱い者、小さくされている者の傍らに寄り添われる方でした。それだけなら特に変わりはありません。しかし、彼はこれまでの王とは違って、決して神から離れることはなかったのです。たとえ、人々から罪人と責められ、十字架につけられても、決して自分自身のために神の力を用いようとはされません(「議員たちも、あざ笑って言った。『他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。』」ルカによる福音書 23:35、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」ルカによる福音書 23:37)。

私たちが必要とする王とはどちらの王でしょう。向かうところ敵なし、連戦連勝、だけど、神から離れてしまう「強い」王でしょうか。それとも、神から離れず、全ての者に寄り添われる「弱い」王でしょうか。

私たちはこの「弱い」王こそ、私たちの救い主であることを知っています(「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」コリントの信徒への手紙一 15:20)。どこまでも他者のために生き、どこまでも神と共におられる王こそ、私たちの真の王にふさわしいのです。そして、私たちは今日も、この方によって生かされています(「つまり……キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」コリントの信徒への手紙一 15:22)。

では、私たちは与えられたその命をどのように用いましょうか。自分自身の強さを求めるためでしょうか。それとも……。

答えはすでに出ているはずです。